

第一章

——夏休み1日目。

「あ~~~~」

後部座席の車の窓を開けて子供のように叫ぶと、草の匂いはらんだ風が髪をなびかせる。視線の先に広がるのは緑の山と畑と田んぼ。

「こら、実日子！　いつまでも子供みたいなことしないの」

「いいでしょ、別に。久しぶりに地元に帰って来たんだから、少しぐらいはしゃいでも……」

車を運転してくれている母に実日子は叫ぶ。大都会東京で一人、頑張っているのだ。生まれ故郷でくらい子供のように振舞ってもばちは当たらないはず

だ。

遠藤実日子、25歳。黒い髪を一つに結んだいたって平凡な女だ。身長だけは165センチとちょっと高いが、胸もお尻も平均並み。顔も少し垂れ目なこと以外、特に特徴はない。

一面に広がる緑の畑と遠くの山の稜線に実日子が目を向ける。輝く青と緑が目を焼いた。

「……まぶし」

小さく呟き、窓を閉めると母が「何？ もう終わり？」と尋ねてきたので、実日子は「開けてると暑いから」と適当に誤魔化した。

「どのくらいこっちにいますの？」

「……、1週間くらいかなあ」

「あら、そんなに休めるの？ 良かったじゃない！」

「まあ…ね」

実日子が歯切れの悪い返事をする。そして、何でもない風を装って尋ねた。

「…お姉ちゃんは？」

「ああ、津喜子？　仕事が忙しいのよ。今、大学病院の救急外来で働いてるみたいで。もう、ずーっと仕事みたい。たまに市内のアパートに作り置きを届けに行ったり、洗濯とか掃除したりしに行ってるけど」

「帰ってこないんだよね…？」

「暦通りで休めないって。…まだ仲直りしてないの？」

「…そういうのじゃないから」

「あっそ」

呆れたように笑う母を恨めしげに睨んだ後、実日子はまた視線を外に向ける。

(もう……そんなに息苦しくない)

普通に呼吸ができる。

心は痛むけれど。

「あら！ 朔哉（さくや）君じゃない！」

「え？」

田舎道を進んでいた車のスピードを母が緩める。

「ほら、あそこ！ 田んぼの所に座ってるでしょ！」

「あ……」

母に言われた方向を見ると、確かに人が座っている。

「あんた朔哉君のこと、大好き大好き言ってたでしょ！ 久しぶりなんだしちよっと話してきなさい。荷物は持って行ってあげるから！」

「え!? あ、ちょ……!」

勝手に盛り上がった母が、朔哉のすぐそばに車を止めて、ウィンドウを下げる。

「朔哉君、うちの娘、帰って来たから、ちょっと話し相手になってあげて!」

「あ、こんなにちは! もちろんいいですよ」

「ありがとう! じゃあよろしく」

「い、嫌! 私、家に帰って休みたいから!」

「はあ? お母さんこれからパートに行かないといけないから。2時間ぐらいで終わるから、朔哉君とちょっと遊んどきなさいよ! ほら!」

「あ、ちょ!」

母にしつしと追い出されるようにして車を降ろされてしまう。そして、実日子が文句を言う前に車はブイーンと発進してしまった。

「久しぶりだね。元気にしてた？」

「…はい」

北大路朔哉（きたおおじ・さくや）。

ド田舎に住んでいるとは思えないほどに整った顔に整った体に整った声を持つとんでもない男。陽の光を反射する艶々の黒髪に、日に焼けた褐色の肌と、男らしい太い眉。黄金色にも見える色素の薄い瞳に、筋肉がしっかりとつきながらもすらりとした体躯、そして186センチの長身。

「暑いでしょ？ こっちに冷たい飲み物と日傘があるから入りな？」

あぜ道に座り込んでいる朔哉がちょいちょいと手招きをしてくる。

「い、いい…。すぐ帰りますから…」

「すぐ帰るからって…。そんな冷たいこと言わないでよ。せっかく久しぶりに会えたんだからさ」

朔哉が「そんな冷たいこと言う子にはお仕置きだぞ、がおー」と自分の爪を見せて可愛らしく脅してくるのを見て、実日子は必死に顔を背けた。

（なんでこの人は、いつもこうやって…！）

「私が…何言ったか、忘れたんですか？」

実日子が唇を噛みしめながら言うと、朔哉が立ち上がり、実日子の前で優しく笑う。

「俺は…実日子ちゃんのお兄ちゃんだからね」

「っ…」

汗がにじむ。

夏はまだ始まったばかりだった。

朔哉は小学生の時からモテていた。

しかしこの男、のらりくらりとかわすのだ。誰に告白されても「俺、農家の跡取りだから、結婚したら大変だよ？　今のご時世、都会に行つて、男女平等つて場所で生きていった方がいいよ」と言つて、まだ小学生で訳が分からない女の子たちがきよんとしている間に、男の子たちと遊ぶためにいなくなつてしまふのだ。

中学、高校になるともう、地元のアイドルみたいな感じになつていた。あまりにもモテすぎて「朔哉君同盟」なるものが女の子たちの間で締結され、朔哉君に告白できるのは、その同盟に加盟し、順番が回つて来た女の子に限られるようになった。

そんな鬼のようにモテていた朔哉だったが、一度たりとも彼女という存在をつくらなかった。その代わりにある女の子だけはいつも隣にすることを許していた。

実日子の姉、津喜子だった。

髪はいつも短くて、性格もさっぱり、男前。けれど、「男とつるんの方が楽しい」などとは言わず、男女どちらとも仲の良いヒーローみたいな女の子。朔哉君が選んだ女の子はそんな女の子だった。

暗くて、引っ込み思案な女の子が朔哉に選ばれるはずもなかったのだ。

「……ほんとに暑いから、帰ります」

実日子が踵を返そうとした瞬間、ぎゅつと手首を掴まれる。

「待ってよ、久しぶりだからいっぱいお話したいんだよ」

「っ……!!」

（ダメ……ダメ、絶対振り返ったらダメ……!）

頭の中ではそう分かっているのに、「ねえ、お願い」と甘えたな声で言わ

れ、実日子は無意識に振り返ってしまう。

「お帰り、実日子ちゃん」

「あう…」

太陽のような眩しい笑顔に見惚れてしまう。

「お願い、飲み物何か奢るから。お話…しよ？」

腰を屈めてこちらの顔を覗き込みながら、コテンと首を傾げられれば、実日子は頷くことしかできないのだ。

「ごめんね、年頃の可愛い可愛い子をこんな軽トラなんかに乗せちゃって」
「いえ、大丈夫です…」

実日子は助手席に乗り、膝の上でぎゅつと拳を握りしめていた。

（ダメ…！　ときめいたらダメ…！　なんのためにここを離れたと思ってる

の!?)

実日子は自分にそう言い聞かせる。

忘れたかったのだ、この男を。

この、極上の男を。

実日子は小さく溜息を吐いた後、窓の外の景色を眺める。

(会わない間に少しずつ免疫ができたと思ってたのに……!)

東京に住んで7年。田舎にはいないようなおしゃれで洗練された男たちと話したり、出かけたりしたこともある。

(都会の男の人を知れば、きっと朔哉さんは田舎のダサイ男だったなと思う様になるはず!)

それで諦められると思っていたのだ。

(なんでパワーアップしてるの、この人!?)

朔哉はすんごくかつこよくなっていた。

日に焼けた肌も、鍛えられた体も、前より伸びた髪も、開けられたピアスも。そして、以前よりもなぜかずっと甘く聞こえる声も。

「実日子ちゃん」

「っ、は、はい！」

突然名前を呼ばれて、実日子は姿勢を正す。

「まだ炭酸飲料、好き？」

「えっと…」

朔哉の低く、ゆっくりとした声が、実日子の体に沁み渡る。

（この声と喋り方…、安心できて、好きだった…）

けど、もう勘違いしない。この人は、姉のものなのだ。

「美味しい檸檬スカッシュ、出してくれるお店があるんだ。そこに行ってもい

い？」

上機嫌な声の朔哉の方を見ないようにしながら、実日子はゴクリと唾を飲み込んだ後に口を開く。

「い、今は…こ、コーヒーの方が好き…です」

「……………そっか。じゃあコーヒーにするね」

「あ、は、はい…」

少しだけ間が空いた返事の違和感を、実日子はすぐに忘れてしまった。

「あ…あの…」

「ん？ どうしたの？ ここのコーヒー、美味しいでしょ？」

「と、とっても美味しいです。い、いや、コーヒーの話じゃなくて…！」

「ん？」

（な、なんでずっと私の顔、見てくるの…！）

実日子は手に持っているコーヒークップに向けていた視線を前へ向ける。すると、綻んだ顔で対面のソファ席に座り、ずっと自分のことを見ている朔哉と目が合ってしまった。

「み、見ないでください…！」

「ええ、見るよ。久しぶりだから、実日子ちゃんが本当に元気なのかしっかり見ておかないと。ほら、ちゃんと俺の方、見て？」

「ひゃあ！」

朔哉が視線を逸らそうとした実日子の両頬に手を当て、グイっと自分の方を向かせる。

「目は…充血してない…大丈夫だね。お肌も…もちもちだ…。でも…これは、何？」

「んっ…！」

朔哉の親指が、実日子の目の下にできた隈をスリスリ♡と撫でてくる。実日子は自分の口から思わず出てしまった情けない声が恥ずかしくて、「は、離してください！」と朔哉の手を振り払う。

「そんな冷たいこと言わないで？ 俺とみかちゃんの仲でしょ？」

（そんなこと、思っただけに…！）

ぎゅうつと実日子の心臓が痛む。

「く、隈は、夏休みにこっちに帰省するために、ちょっと仕事を頑張ってただけです。いつもはこんな隈なんて…！」

鞆から伊達メガネを取り出して、何でもない風を装って実日子はそれをかけた。

（見られた…不細工な…顔…っ）

瞳が潤む。

（見られなくなかったとか…、まだ全然諦められてない証拠じゃん！）
俯いたまま、コーヒークップに手を伸ばす。

「可愛いよ」

「ひゃっ！」

伸ばした自分の手に、スルリと何かが絡みついてくる感触がして、実日子が顔を上げる。視線を上げると、自分の指の間に朔哉の指が沈み込み、恋人繋ぎのような形になってしまっていた。

「なっ…！ は、離して…！」

「限があっても、実日子ちゃんの可愛さは何一つ変わらないよ？ 俺、ずーつと前から実日子ちゃんは可愛いって言ってるのに、ずーつと信じてくれないよね？ なんで？」

「っ…！」

朔哉がにぎにぎ♡と手を握り込んでくる。たったそれだけの仕草で分かる朔哉の手の大きさに、実日子はまた胸がドキドキと高鳴ってきてしまった。

「だ、だって…可愛いとかは、その、私には無縁で…！」

「だからあ…、俺が言ってるよね？ こっちにいる時は、毎日言ってた。ね？ 覚えてるでしょ？」

「っ…お、お、覚えてます…！」

きゆう♡と強く手を握り込まれ、実日子の体がビクビク♡と震える。

「分かった、分かりました…！ 分かったから、も、もうやめて！」

「何が分かったの？ ちゃんと俺に説明して？」

「だ、だから、その、可愛いとか…！」

「誰が？」

「わ、私があ！」

「ちゃんと言つて？」

「ひいん！」

手を引つ張られ、前かがみになった実日子の耳元で朔哉が囁く。

「実日子ちゃんは、とっても可愛い女の子ですって…、俺に言つて？」

「み、実日子ちゃんは、とっても可愛い女の子です！」

やけくそになって実日子がそう言うのと、朔哉の手がすぐに離れていった。

「そうそう、それでいいんだよ。今度自分のこと可愛くないと言つたら、

俺、許さないよ？」

「ひっ…は、はいっ!!」

指の間をまたカリカリ♡と引つ搔かれ、実日子は何度も首を縦に振つたのだ
った。

「あ、こんにちは」

「はひ」

「あはは、はひって何？ 津喜子の妹、……可愛いね」

実日子が朔哉と出会ってしまったのは、小学生4年生の時だった。ある日、習い事の習字から帰ってくると、実日子と津喜子の共同の部屋に、それはそれは美しい男の子が座っていて、ゲームをしていたのだ。それが朔哉だった。実日子は扉を開いたまま、その場で固まり、自分の足の上に重い習字セットを落としてしまった。

「いだいっ！」

「あ」

痛みのあまり、シビビツと痙攣する実日子を見て、目を見開いた朔哉がゲー

ムのコントローラーを放り出し、実日子に駆け寄ってくる。

「大丈夫？ 痛かったね。こっち、おいで」

「は、はひ」

実日子の手を優しく握り込み、朔哉が津喜子のベッドの上に座るように促す。

「痛かったよね？ 大丈夫かな…、骨にひびとか入ってないよね？」

「ひい！」

ベッドに座った自分の足の甲を朔哉に優しく撫でられ、実日子は目を見開き固まった。

「あはは！ 実日子が固まってる！」

それを見て、いつも明るい津喜子がケラケラと笑っている。

「こら、津喜子！ 笑ってる場合じゃないだろ？ 妹ちゃんが怪我したかもし

れないのに！」

朔哉に怒り顔で叱られた津喜子は、ケロッとしてまたゲームに集中し始める。

「実日子はいつもおっちょこちょいでドジなんだ。そんなに言うんなら、朔哉が面倒見てやってくれ」

「お、お姉ちゃん：!？」

実日子の困惑した声に、津喜子が振り返ってニヤリと笑う。

「実日子、おもり役は朔哉に交代だ。これからは、朔哉を本物のお兄ちゃんと思つて頼りなさい。朔哉もいいだろ？　…男兄弟の世話をするぐらいなら、可愛い女の子をお世話したいって言つてただらう？」

「それは、まあ…、言つてたけど」

「ちよ、ちよっと待つて！　お姉ちゃんにおもりなんてしてもらつたことない

もん！ 私は全部自分でできるから！」

「今日も習字道具入れの中に入れ忘れた筆を届けたのは誰だと思ってるんだ、馬鹿実日子」

「それは…ごめんなさい」

しょんぼりと俯く実日子を見て、津喜子の目がすうと細められる。

「いいだろ、朔哉？」

「あっ！」

実日子が朔哉の方を見ると、困惑顔で自分の頬を指でぽりぽりと搔いている。

「お、お姉ちゃん！ 朔哉さんに、そんなの迷惑だから…！」

「…実日子ちゃん、可愛いから、俺のことお兄ちゃんって思うのが嫌じゃなければ全然いいよ？」

「へ…?」

「俺、家族で一番年下なのに、色々させられるから、どうせなら可愛いこのお世話がしたいって前から思ってたんだよね。これからはみかちゃんって呼んでもいい?」

「はひ…っ!」

「ふふ、嬉しいなあ。それに…すっごく可愛い。今まであった中で、一番可愛いよ。これからは困ったことがあったら、いつでも俺を呼んでね? お兄ちゃんは何でもしてあげるからね」

「はひい…っ!」

両手をきゆう♡と優しく握り込まれ、至近距離で微笑まれた実日子は、無意識に首を縦に振ってしまっていた。

それから、始まったのだ。朔哉のとてもなく心臓に悪い「お兄ちゃん」が。

「みかちゃん、帰ろ」

「び」

放課後になって、実日子の教室に笑顔で入って来た朔哉を見て、女子たちは黄色い悲鳴を上げた。実日子は変な声を上げて固まることしかできない。

「ん？ まだ帰る準備終わってなかったの？ 仕方ないなあ。お兄ちゃんがやってあげるから。みかちゃんが可愛いから、俺が全部やってあげる」

「うっ…、さ、朔哉さん…！ あの、私、自分で…！」

「朔哉お兄ちゃん…でしょ？」

「び」

下からニコニコ笑顔で顔を覗き込まれ、実日子はやっぱりコクコクと頷くことしかできなかった。そのまま手を繋がれて、教室を出た実日子は、翌日に同じクラスの女子たちにもみくちやにされてしまった。

「ちょっと！　　どういうこと！　　なんで実日子ちゃんが朔哉様と一緒に帰るの！」

「なんでお兄ちゃんなんて呼んでるの！」

「なんでみかちゃんなんて可愛いあだ名で呼ばれてるの！」

「ひい…！」

同じ学年のキラキラ女子たちに囲まれて、実日子はヒンヒン泣きながら前日のことを説明した。

「…津喜子さんがそう言うなら、まあ仕方ないか」

「津喜子さんと朔哉さんの二人でそういう話になったのなら、まあ…」

「あんたは調子に乗らないでよ！」

「ひい……！」

いたって平凡な顔立ちの母似の自分と違い、田舎に似つかわしくないとまで言われる顔立ちの整った父似の津喜子は、朔哉と同じくらい学校で人気があった。しかも津喜子と朔哉はどちらも見た目だけでなく、成績優秀、スポーツ万能だった。どれもこれも平均並みの自分とは違って。だから、「調子に乗るな」という一言は、他人に言われずとも自分が一番分かっているのだ。

「分かってますよーだ、そんなこと……。私は私で頑張るだけだし！」

空き教室で正座をさせられ詰められていた実日子は、ゆっくりと立ち上がり、教室を出た。

「足、痺れた……っ！」

——中学1年。教室にて。

「みかちゃん、長い髪も似合ってる。すごく綺麗だし、可愛いよ」

「みゃ」

「ふふ…、綺麗な黒い髪…。俺が毎日乾かしてあげてるもんね」

「ぎゃ」

「あんた、朔哉様の何なのよ！」

「髪を毎日綺麗に乾かしてもらってるってどういうことよ！ 朔哉様には姉も

妹もいないはずよ！」

「まさか！ あんたみたいな平凡、ずんぐりむっくり女が彼女なんていう訳ないでしょうねえ！」

「ひがいまふ。せつめいさせてくだふあい（違います。説明させてください

い)」

頬を一軍女子たちに思いつきり引つ張られている実日子は、また津喜子と朔哉のやり取りを言つて聞かせなければならなかった。

「津喜子さんの妹…？　こんなのが？」

「で、でも確かに今年入学してくるって…。この…狸みたいな子が？」

「確かに朔哉さんが特別可愛がつてる女の子がいるって聞いてたけど！　モデ
ル並みに可愛い子だって言われてたけど、こ、これが…っ！」

（失礼すぎる！）

心の中でそうは思っているのだが、口に出せば頬を引つ張られるぐらいでは済まされないかもしれない。高校でもダントツ人気で、女子学生からの告白が絶えない、「モテモテという概念」とまで言われる男、朔哉は相変わらず実日子の「兄」を自称し、あれやこれやと世話を焼いてくるのだ。

「あ、あの、事情は分かっていただけだと思うので、これで帰っても…?」

へらへらと笑いながら、空き教室の床に正座させられていた実日子が立ち上がろうとすると、グッと肩を下に押されて阻止されてしまう。

「あ、あの…!」

「…髪、切ってきて」

「へ?」

「朔哉様が綺麗に手入れしてるっていうその髪、今日切ってきて」

「へ、いや、あの…!」

「まさか、あんた、朔哉様のことが好きなの?」

「へ? いや、いや、私なんかが朔哉さんに釣り合う訳が…っ」

「じゃあ朔哉様に付きまとわないで」

朔哉と同じ学年で、顔立ちも綺麗な女子学生が実日子の胸倉を掴み、至近距

離で凄む。実日子はゴクリと唾を飲み込んだ。

「どれだけ私たちが、朔哉様の『特別』になりたくて努力してると思ってるの？ あんたなんて、ただ津喜子さんの妹って言うだけで良くしてもらってるだけでしょ？ 妹扱いって言うのも意味わかんない！ なら私も妹扱いしてもらいたい！ 髪を乾かしてもらいたいわよ！ 手を繋いで一緒に帰ってほしいわよ！ あんたがいけるなら、私が立候補すれば妹にしてももらえるんじゃない？」

「ちよつと抜け駆けしないですよ！ 私の方が妹属性強いわよ！」

「ただツインテールなだけでしょ！ 私の方が妹力、高いわよ！」

3人の美人な女子たちがぎゃあぎゃああと内輪揉めを始めたので、実日子はこっそりと教室から出ようと思ひ、扉に手を掛けた。

「切ってきなさいよ」

「ひっ……！」

低い声に思わず振り返ると、取っ組み合いのけんかをしていた3人が、ピタリと動きを止めて実日子をジーツと見ていたのだ。

「ひいい！」

実日子は悲鳴を上げて、自分の教室まで走って戻った。

「はあ…はあ…、ちゅ、中学でもこんなことになるの…っ!？」

まだ入学して2週間。部活に入っている子も少なく、授業が終わってかなり時間が経った教室には誰も残っていない——はずだった。

「お帰り、みかちゃん」

「朔哉…さん」

「心配したよ、教室にいないから。一緒に帰ろうね」

「……津喜子お姉ちゃんは？」

「津喜子？ 津喜子なら今日は生徒会があるから遅くなるよ？ 流石に津喜子

まで待っていると遅くなるから、今日は俺と一緒に帰ろうね」

「っ……！」

きゆう♡と優しく手を握られ、実日子は慌てて自分の手を引き抜いた。朔哉は悲しそうな顔で実日子を見る。

「……嫌だった？」

「い、嫌とかじゃないです。で、でも、あの、もう、私、小学生じゃないんです。だから、こういうことは……っ！」

「手を握ったらダメなの？」

「っ……！」

朔哉の長く骨ばった指が、スカートの前で握り込んだ実日子の手の甲を、甘えるようにツンツン♡と突いてくる。

「手は、ずっと握ってきたよ？　なんで今更ダメなの？　実日子ちゃん、おっ

ちよこちよいで、こけることもあるから、手を繋いでいた方が安心なんだよ？」

「も、もう中学生ですから転んだりしません！ それに…、転んだら、一人で立てますから」

「ふふ、強くなったね、みかちゃん」

朔哉が一步近づいてきて、実日子の背中に両手を回して組み、その中に実日子の体を閉じ込めてしまう。

「中学生になって、だいぶしつかりしてきたね。それはとってもいいことなんだろうけど、…俺はちよつと寂しいかもな」

「な、なんで…っ」

「もっともっとお世話してあげたいんだよ、兄の俺は。もっともっと妹のお世話をしてあげたい。……ずっと子供のままならいいのに」

「な、なんでそんな…」

年上の女子学生たちに詰められたせいで緊張し、額にじんわりと滲んだ汗のせいで張り付いた前髪を、朔哉が優しく笑いながら整えてくれる。

「だって、実日子ちゃんは特別だから」

「特別…」

「そう、俺の特別な女の子…、大事な大事な妹だよ？」

「っ……」

一瞬明るくなった実日子の顔がまた一瞬で曇る。その表情を見られないように、実日子がうつむいたまま黙り込むと、朔哉は実日子の体を抱き寄せ、つむじにスリ♡と頬ずりした。

「帰ろ、みかちゃん」

「あ、あの…わ、私、これから用事があるので」

「用事…？　今日は、何もなかったはずだよね？　突然何か用事ができたの？　俺に教えて？　どこかに行くなら俺もついて行くから」

「そ、それは…っ！」

朔哉の手がスルリと実日子の手首まで伸び、そこをスリスリ♡と優しく撫でてくる。

「もう5時だよ？　これから出かけるなんて危ないよ？　田舎だから、電灯もあんまりないし、すぐ暗くなっちゃうから、ね？」

「た、ただ、美容室に行くだけで…っ！」

「美容室…？」

俯いた実日子の顔に優しく両手を当て、朔哉が上を向かせる。

「美容室なら、1週間前に行ったでしょ？　土曜日に、俺と一緒に行ったよね？　トリートメントもしたし、まだ大丈夫だと思うけど、どこか気にな

るところあるの？」

「っひ…！」

朔哉の手が、実日子の肩まで伸びた髪を優しく掴み、そこにキスをする。

「うん…サラサラで綺麗。行く必要ないと思うけど…。気になるなら、電車でちよつと市内まで出て、高めのトリートメントとか買いに行く？ それとも、今度美容室に言った時に、おすすめのトリートメント聞いてみようか？ お店のがいいなら、俺が買っておいてあげるから…ね？」

「違う…違うんです…」

「何が違うの、みかちゃん？」

「っ！」

朔哉が実日子の髪を耳にかけてあげた後に尋ねる。実日子はゴクリと唾を飲み込んだ後、震えそうになる口をゆっくりと開いた。

「き、切りたいんです、髪…を」

「…なんで？」

「あ、暑いから…」

「暑い？ そっか…、髪が長いと熱が籠るっていうよね？ なら結べば大丈夫じゃない？ 新しいヘアゴム、買いに行く？」

「き、切るんです、切るの…、もう、長く…しない」

「だから…、何で？」

「暑いからって…さっきから言ってる…！」

「だから…結べばいいって言ってるでしょ？」

「っ…」

朔哉の優しい声を聞いていると、無意識に頷いてしまいうので、実日子は距離を取るために一歩下がった。するとすぐに朔哉が距離を詰めてきて、とうと

う窓際まで追い詰められてしまう。

「きゃ！」

「みかちゃん、どうしても切りたいて言うなら止めないけど。でも…俺は、みかちゃんの綺麗な髪、ずっと見てたいな」

「っっっ！」

教室のカーテンの中、夕焼けの光に照らされた朔哉のキラキラと光る朔哉の瞳が、まっすぐに実日子だけを見つめる。

「…ね？ 美容室なら、また来月連れて行ってあげるから。今回は…なし、ね？」

「はい…」

「ふふ、いい子だね、俺の可愛い可愛い妹ちゃん」

頭を撫でられ、実日子は力なく頷いた。

姉の長くて美しい黒髪を思い出しながら。

——高校一年。

「みかちゃん、ほら、お弁当忘れてるよ？ 『ちよつと体がぷにぷにしてきたかも…』 って昨日も鏡の前で悩んでたから、ダイエットメニューにしたからね。でもダイエットなんかしなくても、みかちゃんはすっごく可愛いよ」

「ぎゃひ」

昼休み、わざわざ実日子の教室までやってきた朔哉は、実日子の席の前に座り込み、顎を机の上に乗せてコテンと首を傾げた。

「な、な、な！ お姉ちゃんが届けてくれるはずじゃ！」

「津喜子なら、職員室に呼ばれちゃったんだよ。全国模試で国語1位になったから、学校が横断幕作りたいみたいなこと言ってるみたいで」

「そ、それって、確か、朔哉さんも…」

「ん？　へへ、そうだよ？　俺も英語と数学１位だったんだ。覚えててくれてお兄ちゃん嬉しいなあ。嬉しいから今日は放課後、何でも好きなもの奢ってあげる。この前言ってたパフェのお店、寄って帰る？」

「朔哉様とどういう関係なのよ、このドブス！」

「３回目の説明はもうしんどいですっ！」

それはそれは美しい高校３年の女子生徒に胸倉を掴まれた実日子は、ヒンヒンと悲鳴を上げながら、いつも通りの説明を簡潔に終わらせた。

「津喜子さんの妹…？」

「こ、こんなちんくりん…が？」

「その扱いも、もう慣れちゃいました」

実日子が空き教室の床に黙って正座したのを見て、実日子に詰め寄っていた女子生徒は、何だかちょっとだけ申し訳なさそうな態度で、立つように促してくれた。

「じゃあ、あなたと朔哉様は別に何の関係もない、ただの他人っていうことね？　ただ津喜子さんと朔哉様が仲がいいから、そのおこぼれに預かっている……という認識で良かった？」

「は、はい……っ！」

実日子はとにかくこの場を乗り切ろうと、オーバーリアクションで頷いた。

「ふうん……。あなたは？」

「へ？」

「あなたは朔哉様のことが好きな訳？」

「私は、その……妹、みたいなものというか、もう妹というか……」

「へえ…、妹ねえ。…妹なら、お兄ちゃんのこと好きになったりとかしないよねえ？ それって、変態だしね？」

「っ…は、はい…」

「というか、高校生にもなって、他人の男、お兄ちゃん呼ばわりして世話焼いでもらってるの、だいぶ痛いと思うけど？ 自覚ある？」

「……はい」

「なら、やめたら？」

「……もうやらなくていいとは伝えてます。でも、その、朔哉さんが『俺がしたいからって』言ってる…」

「へえ、人のせい？」

「そういう訳じゃ…っひっ！」

女子生徒の足が、実日子の顔面の横スレスレを通過って、後ろの壁に激しく叩

きつけられる。

「じゃあさ、妹とかもうどうでもよくしちやえばよくない？」

「どうすれば……いいんですか？」

怯えて震える実日子を見て、女子生徒たちはニンマリと笑った。

「みかちゃん、帰ろ」

「あ、あの……」

トボトボと一人、学校の玄関に向かうと、壁に背を預けていたとんでもないイケメンが笑顔で手を振ってくる。高校生になって、身長もぐんぐん伸び、体格も良くなり、これまで以上にギャンモテしている朔哉が実日子の鞆をいつものように受け取ろうとしたが、実日子は身を引いてそれを避けた。

「みかちゃん？」

「わ、私、ほ、ほかの人と、帰るので」

「ほかの人…？ お友達かな？ なら、一緒に…」

「す、好きな人なんです…っ！」

「好きな…人？」

朔哉が意味我が分からないと言った顔でコテンと首を傾げる。

「大親友…ってこと？」

「ち、違います…っ！ お、男の子で、その、か、彼氏になってほしいって思ってる人で…っ！」

実日子が自分の両手をぎゅうっと握り込みながら、俯いて必死に言葉を紡ぐ。

「こ、高校生になって、そ、そういうことにも、興味が出てきたんです！ ドラマとか、漫画とか見ても、みんな彼氏とかつくって、恋愛して、楽しそうに

してて！　だ、だから、私も、そういうことがしてみたくて……っ！　だ、だから、もう、私にお兄ちゃんは必要なくて……っ！」

「彼氏と、何がしたいの？」

「っ……」

ふんわりと甘いバニラの香りが鼻に届き、一気に実日子の心拍数が跳ね上がる。これは朔哉が愛用している香水の匂いで、それが香るといふことは、朔哉が至近距離まで近づいてきていることを示していた。

「あ、あの……っ！」

「彼氏としたいことって何？　したいことあるなら、全部……俺が、お兄ちゃんが付き合ってあげるよ？　買い物？　お出かけ？　それなら、今まで全部俺とやってきたでしょ？　彼氏なんかつくらなくても、何も変わらないよ？」

「そうじゃない……、そうじゃないの、朔哉さん……っ」

「みかちゃん……？」

「あ、朔哉あ♡」

可愛らしい女の子の声がした。実日子が顔を上げると、自分呼び出してきた年上の女子生徒が朔哉の腕にぎゅうっと絡み付いていた。

「ねえ、何してるの？　一緒に帰ろうよ。それかカラオケ行かない？　朔哉、全然付き合ってくれないんだもん」

「俺は、実日子と帰らないといけないから、放課後は無理だって伝えてるだろ？」

朔哉が呆れたような顔で、女子生徒を見る。

「……」

実日子は、朔哉が腕に絡み付いている女子生徒を引きはがそうとしない様子を見て、少しだけ唇を噛んだ。それを見た女子生徒がにっこりと笑う。

「ほら、実日子ちゃん…もさあ、いい加減自由に高校生活楽しみたいでしょ？
彼氏とかつくりたいだろうし。…いつまでも『お兄ちゃん』とベタベタしてる
のって、ちょっと…ねえ？」

「っ、そ、そう。高校生にもなって、お兄ちゃんと、こんな、仲良くはしない
です…っ！」

実日子が自分の鞆をぎゅっと掴み、後ろへ下がる。

「みかちゃん？　なんでいきなりそんなこと…」

「それに…、本当の妹なら、お兄ちゃんの恋を応援…とかするべきだよね？
ねえ、実日子…ちゃん？」

「は、はい…」

「ほおら！　だから言ったでしょ、朔哉あ♡妹ちゃんも、もう兄妹ごっこか
飽き飽きしてるんだって！　朔哉もお、そんなお遊びじゃなくてえ、彼女とか

つくりなよお！ あたし、今、ちょうど、彼氏いないよお？」

「冗談、言うな」

朔哉がクスツと笑うのを見て、また実日子の心が痛む。

「きよ、今日は、用事があるから……帰る！」

「みかちゃん、俺も一緒に帰るから」

「朔哉あ、買い物付き合ってよお」

「放課後はダメだって。それに、俺は実日子ちゃんの面倒を見るように、津喜子から言われてて……」

「帰る。朔哉さんは、その人に付き合ってあげてください！」

実日子は、靴箱から自分の靴を取り出し、急いで玄関から出て行ったのだった。

「暑い……」

青い稲が左右の田んぼで揺れるあぜ道を、実日子は一人でゆっくりと歩いていた。オレンジ色の光はだんだんと弱くなり、紺色が世界を覆い尽くそうとしている。耳障りなアブラゼミの声は、寂しげなヒグラシのそれに代わり、実日子の心を煩わしい程に揺さぶっていた。

「兄……妹……」

小さく呟いた後、実日子は大きな溜息を吐いた。

「みか」

「っ……!」

背後からチリンチリンとベルを鳴らされ、実日子が慌てて振り返ると、自転車に乗った津喜子がすぐ隣に止まった。

「一人か？ 朔哉はどうした？」

「……もう、一緒には帰らないよ」

実日子がぶつきらぼうに言って歩き出すと、津喜子が自転車をやつくりと漕ぎながら付いてくる。

「なんで？ 喧嘩でもしたのか？」

「してないよ！ ただ……他人なのに、お兄ちゃんとか、妹、とかおかしいですよ。もう高校生なのに……」

「そうか？ お互いがその関係性で満足してるんだったら、私は構わないと思うけどなあ」

実日子がちらりと隣を見ると、津喜子の美しく長い黒髪が風に揺れていた。微かに残った夕焼けの光が、津喜子の瞳をオレンジ色に変える。

「朔哉はみかのこと大好きだぞ？ 朔哉の家族には女の子がいなから、家もなんだか男臭いつて。みかと一緒にいると、安心するつて。ああ、そうだ！

喧嘩したんなら、今週末、一緒に3人で出かけよう」

津喜子がにつこりと実日子に笑いかける。実日子の顔はそれとは正反対に強張った。

「……それって、お姉ちゃんと朔哉さん、二人で行く予定のやつだったんじゃないの？」

「ん？ ああ、確かに、2人で川に釣りに行く約束をしてる！ 女の子だと、そもそも釣りに付き合ってくれないし、ほかの男だと、やれカラオケだの、映画だの、うちに来いだのうるさいからなあ。そういうのに付き合ってくれるのは、もう朔哉だけなんだ」

「……じゃあ、2人で行った方がいいよ」

「なんで？ 3人の方が楽しいだろ？ 昔も、よく3人で出かけたじゃないか。そ、それに、もう一人ぐらい呼んでもいいぞ！ ほ、ほら、実日子の友達

に釣りが好きな奴がいただろ……っ！」

「……二人がいいよ」

「そ、そうか……？」

「うん」

実日子は唇を尖らせる津喜子に優しく微笑んだ。

「ちょっとジュース買ってくる」

母親にそう告げて、Tシャツに短パン、サンダル姿で実日子は家を出た。夜の9時、明かりがほとんどない田舎の満点の星空の下、実日子は徒歩10分程かかる自動販売機に向かって歩き出した。

「ふう……、あれ？」

道の向こうから懷中電灯の明かりが見え、実日子は「おーい」と声を掛け

る。こんな時間にこんな所を歩いているなら、いつも夜に犬の散歩をしているお隣のおばあちゃんだと思ったのだ。ニコニコと笑って元気よく手を振った実日子は、向かってくるシルエットが随分と大きいことに気付き、歩みを止めた。

（あれ…？ おばあちゃんじゃない…？ こんな夜に、誰…？）
怖くなってきた実日子が踵を返そうとした時。

「みかちゃん」

「っ！」

手首を優しく握り込まれ、実日子が動きを止める。優しい優しい低い声音の持ち主が分からないはずもない。

「こんばんは、話がしたくて、ちよつと来ちゃった」

「こん…ばんは」

風呂上りなのか、まだ濡れている髪をラフに髪ゴムで縛り、白いＴシャツに灰色のスウェットを着た朔哉が、笑って立っていた。

「あの…学校では、その、ごめんなさい」

実日子は、ガバツと頭を下げて朔哉に謝る。

「朔哉さんにこれまでずっとお世話になったのに、突然あんな風に言われたら、いい気しないですよ？　ごめんなさい」

「そんなこと気にしないでいいのに。ごめんね、一緒に帰れなくて。あの子、同じクラスの子なんだけど、買い物に付き合えてうるさくて。ほんととは行きたくなかったけど、みかちゃんが行けって言うからちよつとだけ付き合ってた」

「…楽しかった？」

「ん？　全然楽しくなかったよ」

「そう…ですか」

実日子がへらりと笑うのを見て、朔哉が少しだけ顔を曇らせる。

「どうしたの？　ちょっと元気がない…みたいだけど。体調、悪い？」

「っ…！」

朔哉の手が伸びてきて、実日子の首筋にピトリと手の甲を当てた。

「熱は…ないみたいだね？　食欲は？　夜ご飯はちゃんと食べられた？」

「ふふ…」

心配そうに尋ねてくる朔哉を見て、実日子はクスクスと笑う。それを見て、朔哉は不思議そうに首を傾げた。

「どうして笑ってるの？」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「っ…あはは、お兄ちゃんって呼んでくれるの久しぶりだね？　最近はずっと

朔哉さんって呼んでくるから、ちょっと寂しかった。これから……しばらくはお兄ちゃんって呼んでいいんだよ？ 俺とみかちゃんの仲だからね？」

実日子は無言で頷く。

「……朔哉さんは、高校を卒業したら、どうするんですか？」

「俺？ 俺は、市内の大学に実家から通う予定。津喜子と同じ大学だよ。ま

あ、津喜子は医学部だから、学部は違うけどね。俺は実家の仕事継ぐ予定だから、その勉強をするけど」

「そっか……。そう、ですよね」

「俺、一人暮らしする予定ないから、ちゃんと実日子ちゃんのお兄ちゃん、できるからね？ ほら、実日子ちゃんも同じ大学志望でしょ？ 勉強とかも教えられるし、俺のこと、これまでに上にもっともっと頼ってくれていいからね？ あと……」

「ん？」

朔哉が実日子の頭を優しく撫でる。

「……彼氏とかは、大学に合格してからにしようね？ 俺の友達でも、恋愛にのめり込んでちゃって、大学落ちちゃった奴いるからさ。…ね？」

「…うん、分かった」

「いい子だね、流石俺の妹、津喜子の妹だ」

「うん…ありがとう、お兄ちゃん」

またヘラリと笑う実日子を、朔哉は満足そうに見つめる。

「それで、こんな夜にどうしたの？」

「あ、ジュース、買おうと思って」

「ああ、それなら一緒に行つてあげる」

「…ありがとう」

二人は連れ立って、あと少しで到着する自動販売機まで歩く。

「あれ…？ 誰かいる…」

「お！ 実日子！」

自販機の前でうんうんと唸っていた男が、実日子たちに気付いてぶんぶんと大きく手を振って来た。

「開成、何してるの？」

「勉強のおともにジュース買いに来たんだよ。あ、朔哉先輩、お疲れ様です！」

「うん、開成もお疲れ様」

そこにいたのは、実日子の同級生であり、朔哉と同じバスケットボール部に所属する泉開成（いずみ・かいせい）だった。

「開成、何買うの？」

「あ？ 炭酸だよ、炭酸。シャキツとしてーからさ。お前も一緒に炭酸だろう？」

「わ、わわわ！」

「むぐう！」

実日子は、急いで開成の口を塞いだ。

「なにすんだよ……！」

「い、言わないでよ、馬鹿！」

「なんだよ、もしかして先輩に炭酸好きなの黙ってんの？ だっさ！」

「うるさい！」

「いてっ！」

実日子は開成の脛に蹴りを入れた後、笑顔で朔哉を振り返った。

「……みかちゃんも、炭酸にするの？」

「い、いえ！ 私は、そのお茶でいいです！」

あははと笑いながら財布を取り出そうとする前に、朔哉がスマホ決済で勝手に飲み物を買ってしまう。

「あっ！」

「これが飲みたかったんでしょ？ 開成もどーぞ」

「先輩、マジありがとうございます!!」

朔哉から同じ炭酸飲料を手渡され、実日子と開成はお礼を言って頭を下げた。

「お前、一人でここまで来たのか？ いくら田舎でも物騒だぞ？ しょうがねーから送ってやるよ」

「はあ？ そんなのいらないし」

朔哉が自分の分のお茶を買っている間に、実日子は開成と文句を言い合っ

いた。

「まさか、家が正反対の先輩に送ってもらうつもりかあ？」

「それは…その…」

実日子が言葉に窮していると、開成が一気にジュースを飲み干し、ゴミ箱にペットボトルを放り込む。

「ほら、帰るぞ。先輩、お疲れさまでした」

「ああ、もう…！」

開成に手を掴まれそうになった時、実日子は襟首を引かれてしまった。

「ひゃ！」

「大丈夫。俺が送るから、開成はもう家に帰んなさい」

「え？先輩がそんなことする必要ないですよ。ただでさえ、実日子は先輩に甘えてるんですから。ちょっとぐらい厳しくしないと」

「あはは、俺がしたくてやってるからいいんだよ。ほら、明日も朝練だろ。早く帰って寝ろ」

「先輩がそういうなら……。実日子、あんまり先輩に迷惑かけんなよ！」

「うるさい！ 早く帰りなさいよ！」

「お、可愛くない！」

そう憎まれ口を叩きながら、開成はヒラヒラと手を振って、夜の闇に消えていった。

「あの、朔哉さん、私、家まで一人で帰れますから……！」

「帰るよ、みかちゃん」

「……」

ぎゅっと手を握り込まれ、歩くように促された実日子の足がゆっくりと動き出す。

（なんか…手の力、強い…っ。ちょっとだけ…っ）

「いたっ…！」

「あ、ごめんごめん、痛かった？」

今までの強い力が嘘だったかのように、スルリと朔哉の手が離れていく。こちらを振り向いた朔哉が心配そうに実日子の顔を覗き込んだ。

「ごめんね、暗かったから、手を離したら危ないかと思って。それに、みかちゃんも、暗いの、怖いでしょ？ 小さい時、夜になるとすぐ怖い怖いって言うて俺に抱き着いてきて…」

「もう、子供じゃないですよ、私」

実日子は朔哉を追い越して前に出ると、クルリと後ろを振り返る。

「もう大丈夫ですから。ありがとうございます」

「そう？ でもまだ俺は心配だよ？」

「お兄ちゃんだからですか？」

「そうだよ」

「ふふ」

実日子は前を向くと一人で歩き出す。すぐ後ろから朔哉が付いてくる気配を感じたが、実日子は決して振り返らなかった。

——高校三年生。

「なあ、お前、志望校変えたのか？」

「んえ」

昼に食べ損ねた学食のパンを、放課後、ちょうど誰もいない教室で一人食べていた実日子は、開成に声を掛けられ、顔を上げた。

「んぐっ。ふう…どうしたの？ モテ男君がうちの教室まで来て？」

朔哉の後を引き継ぎ、バスケットボール部のキャプテンになった開成は、夏のインターハイでも大活躍し、たくさんの女子からモテまくっていた。それでも、朔哉の人氣には届かないのだが。

「担任に聞いた。お前、東京の大学、行くのか？」

「えー、聞いたの？ 内緒にしてよね」

「…誰に？」

短い坊主頭に使っていた開成の髪型は、受験本番の冬になった今、朔哉と同じくらいまで伸びてきている。襟足が少しだけ伸びたそれに朔哉を重ねてしまい、実日子は慌てて思考を切り替えた。そんな実日子の前の席に座り、椅子を跨いでこちらを見てくる開成に、実日子は食べていたアンパンを半分に割って手渡す。

「色々。友達とか…」

「朔哉さん……とか？」

「……分かってるんなら、いちいち聞かないで」

実日子が軽く睨みつけると、開成が「悪い」と口だけの謝罪をして、アンパンを食べ始める。そのまま二人でパンを食べ進めていると、先に食べきった開成が口を開いた。

「好きだ」

「……誰が？」

「お前……が」

「……」

実日子の瞳がゆらりと揺れた。

「なあ……返事、くれよ」

開成が手を握ろうとする前に、実日子は席から立ち上がった。

「っ、実日子っ！」

「お姉ちゃんに手が届かないから、私で…妥協したいの？」

「っ！」

開成が目を見開き、一瞬だけ固まった。そしてすぐに我に返り、実日子の手を掴む。

「待て、違う。俺は、そんな…っ！」

「お姉ちゃんが好きなくせに？　それで…ちょっとだけ面影がある…『俺が告白すれば喜んで付き合うだろう陰キャ女』で、妥協した？」

「実日子…、俺は！」

「代わりになれないよ。それに全然違うじゃん、私とお姉ちゃん。全然…、違う」

「実日子っ…！　俺、その、そんなつもりじゃ！」

「開成は、スポーツ推薦だったよね。受験、頑張ろうね」

そう言って開成の手に炭酸飲料の缶をねじ込み、実日子は教室から出て行った。

「ふう……さむっ」

一人で自宅まで道を帰る。あまりにも寒いと思っていたら、空からひらひらと雪が降ってきていた。

「わあ……、こりゃあ早く帰らないと」

今日は金曜日だから、明日、学校はない。雪が積もって寒い中、ガタガタと震えながら登校しなくてもいい。あったかい自宅でぬくぬくとしながら、受験に備えて勉強すればいいのだ。

「さむ……」

手袋をしていても、分厚い靴下を履いていても、寒さが伝わってきて実日子

の体温を奪っていく。

(早く…早く帰ろう)

「帰って、お風呂に入って、あったかいもの、食べて…」

ブツブツと言いながら、実日子は速足で自宅へと帰り、そのまますぐにお風呂へと入った。冷え切った体をたっぷりのお湯で温めると、心も、体も少しだけ温まったような気がした。

「お母さん、ご飯まで部屋で勉強する」

「はあい……あっ！」

母が何か言っていたが、もう階段を上った後だったので、適当に返事だけで、自室の扉を開けようとした。

「はは。やっぱり、俺のこと、一番分かってくれてるのは、津喜子だね」

「っ……！」

今まで聞いたことのないような甘ったるくて、嬉しそうで、恋焦がれた声で。

「っ……！」

音をたてないように、ゆっくりと掴んだドアノブから手を離す。

「はーっ……」

いつもなら別に何とも思わなかった。少しだけ深呼吸して、「あれ？ お姉ちゃんたち、もう帰ってたんか」と笑って目の前の扉を開けられた。二人の笑顔に、同じ顔を返すことができたのだ。

でも、今日は無理だった。

——また比べられたから。

「っ…、はぁーっ、はぁーっ！」

呼吸が苦しい。まるで、水の中にいるみたいで、ずっとずっと苦しい。

——ここは、息苦しい。

「っ、さよなら」

優秀で、優しく、大好きな二人が傷つかないように。実日子は小さな声でお別れを告げた。

その日以降、実日子はさらに勉強へと打ち込み、津喜子と朔哉とはできるだけ顔を合わせないようにした。どうしても顔を合わせないといけない時には

「勉強したいから」と言って、早々に話を切り上げることにした。

そして、志望校への願書を出す日。両親に、東京の大学に行きたいことを告げた。最初は困惑していた両親も、実日子が志望校の大学に、学びたい教授がいること、しっかりバイトをして、家賃代だけだがしっかり払うつもりでいることを必死に訴えると、これまで頑張っただけで勉強してきたことを見ていてくれたのか「頑張りなさい」と応援してくれることになった。

そして、津喜子にもそれを伝えようとする母に実日子は「自分で言いたいから黙っていて欲しい」と告げた。

年が明け、受験が始まり、合格発表の日。実日子は、パソコンで自分が合格したことを知り、飛び上がって喜ぶ。その後、すぐに事前に調べていた東京のアパートを内見、父とともに契約をした。

「みか！ 東京の大学に行くってどういうことだ！」

「途中で志望校が変わったんだよ」

「それならどうしてもっと早く教えてくれなかった？」

引っ越しも近くなった日、医学部に通い忙しくしている津喜子にとうとう通う大学が違ふことがバレてしまった。そして、それは朔哉にもそれがバレてしまったことを意味する。実日子は、自分の前で仁王立ちしている津喜子と朔哉をぼんやりと見上げた。

（ああ……、お似合いだなあ）

そうだ。津喜子には朔哉、朔哉には津喜子。

——自分が入る余地などなかったのだ、最初から。

「…みかちゃん、何で志望校変えたのに、俺たちに教えてくれなかったの？」

「…？ だって、言う必要ないから」

「なんでそんなこと……」

「みか、私たちは、みかの何だ？」

「お姉ちゃんと……、お兄ちゃん」

実日子がそう言うのと津喜子が舌打ちした。

「なら、教えるべきだろ！」

「津喜子、ちょっと落ち着いて」

「っ！ 朔哉はいいのか！ 実日子がいなくなるんだぞ！」

「まずは津喜子が落ち着かないと、みかちゃんもちやんと話、できないだろ？」

「それは……まあ」

「な？ 落ち着いて」

朔哉の瞳に津喜子が映り、津喜子の瞳に朔哉が映る。

（ああ…。いつそ嫌われてしまおう）

「…息苦しい」

床に正座していた実日子がスクッとその場に立ち上がる。

「実日子、まだ話は終わって…！」

「都会の金持ちで、かつこよくて、洗練されて、優しい男の人をゲットして、お金持ちになるの」

「…は？ 実日子、何を言ってる…」

「SNSで見えないの？ 都会の女の子ってすっごくキラキラしてて楽しそう。こんな田舎で、チミチミ働いて、人生無駄になんかしたくない。都会で大

金持ちになる！ SNSにそんな方法いくらでも転がってる！ …お姉ちゃん
みたいに、医者になって、田舎であくせく働くより、人生イージーモードでし
よ？」

「……みか、本気で言ってるのか？」

津喜子の拳が震える。

「本気に決まってるでしょ？ だから東京の大学に行くの。お姉ちゃんなん
か、大っ嫌いだよ！」

「…………しばらく話したくない」

「私だって！」

そのまま無言で部屋を出て行く津喜子の背中を実日子が見送る。

「…朔哉さんも、出て行ってください」

「みかちゃん、本当のこと、教えて？」

朔哉が実日子の前にしゃがみ込み、両手を優しく握り込んでくる。

「ちゃんと、みかちゃんの気持ちを知りたいよ。だから…」

「いいですよ、教えてあげる。あのね…」

「うん」

実日子は朔哉の手を振り払った。

「っ…!!」

「田舎のダツさい男、大っ嫌いなんです!」

「みか…ちや…」

「嫌ですよ。田舎で人生終えるなんて! 私、もっともっと輝きたい。こんな…泥臭いところで生きていたくない。こんな…ところで、諦めたくないっ!」

「みかちゃん、どうして…」

「さようなら、お兄ちゃん。私、都会で幸せになるから!!」

ヨロヨロと立ち上がる朔哉の胸をトンと押して、たたらを踏ませた実日子は、喘ぐような、泣きそうな声で朔哉に告げた。

「バイバイ…、田舎のダッさいお兄ちゃん！」

そのまま実日子は、東京のアパートへと引つ越したのだった。

（あんな…最悪な別れしたのに！　もう、二度と会うつもり、なかったのに
い！）

———なのはどうして。

「ほら、みかちゃん。あーん」

「ひい！」

朔哉が作った手作りプリンをあーんで食べさせられているのだろうか。

「あ、あの…あの、私が、7年前に、なんて言ったか忘れたんですか！」

「ほら、お口、あーんして？」

「ひい！　いうこと聞いてくれないっ！」

実日子は帰ろうとしたのだ。

ちゃんとコーヒー代も自分で払って、朔哉の車に乗らずに自分で帰ろうとしたのだ。

「あ、そうだ。買わないといけないものがあつたんだ」

「え？　あ、じゃあここでお別れで…」

「近くのスーパーでね？　卵が激安なんだけど、おひとり様1パックまでって決まってるんだ。でも俺、結構食べるからどうしても2パック欲しくて。ね

え、みかちゃん、ちょっとだけ…付き合ってくれない?」

「あ、えっと、卵ですか? わ、分かりました。結局、コーヒーも奢っていた
だいたので、そのぐらいなら…」

「ありがとう」

そう頼まれて、実日子は朔哉の車に乗り込み、一緒にスーパーに向かったのだ。

(卵買うだけだし…、近くのバス停からバスに乗って、家に帰ればいいか…)
そう軽く考えていた自分を殴ってやりたい。

「あ、そうだ。みかちゃん、プリン好き?」

「プリン…ですか? え、あ、そ、そうですね…す、好きです」

「そうだよねえ。小さい時から、大好きだったよねえ? 実は今度、親戚の子
たちが遊びに来るって言って、その時にプリンをおやつに出してあげようと思

っててね。昨日、ちょっと作ってみたんだ。それで、ちょっと作りすぎちゃって。良かったら、うちで食べて行かない？」

「え……いや、私、もう帰るって……」

「そっかあ……。じゃあ仕方ないね。どうしようかなあ……うーん、困ったなあ。うーん……」

「あ、う、その……」

「あ、ごめんね、気にしないでいいからね」

「あ……うう……」

身長がとっても高くて、顔がとっても良くて、声もいい男が、困った顔で頬を掻いている。

「うう……、お手伝いします」

「ほんと!? 嬉しいなあ、助かるよ。ありがとう」

それに加えて、まだ未練が断ち切れてない男なら、無情に切り捨てることなど、できる訳もなかった。

「自分で食べられますからあ！」

朔哉が現在、一人暮らしをしているという少し古めの二階建ての日本家屋に案内された実日子は、車を駐車している朔哉より先に、玄関の引き戸を開けた。中はあまり物を置いていないシンプルな内装になっていた。広い玄関には、可愛らしい野花が飾られ、朔哉の物であろう仕事用の長靴と、ブランド物のおしゃれな靴が並べられている。大きな廊下を挟んで右側が台所、左側が居間になっていて、部屋全体を周り廊下がぐるりと囲んでいて、太陽の光が家を明るく照らしていた。縁側には風鈴がかけてあり、風に揺れてチリンと涼しさを運んでいる。

（なんか…居心地、良さそう…）

「ほら、暑いから早く中に入って。クーラー付けるから」

「っ…！」

背中にとっと手を添えられ、実日子はビクリと体を震わせる。そして慌てて一歩前に出て、朔哉と距離を取った。

「ひ、人の家に先に入るのはちよっと…！」

「分かったよ、じゃあ俺が先に入るね？ ほら、どうぞお」

「お、お邪魔します」

スタスタと部屋の中に入っていく朔哉を追う。

「先におてて、洗ってきな？ クーラーと扇風機付けとくから。廊下の奥行つて左だよ」

「は、はい」

綺麗に掃除された廊下を進んでいくと、タイル張りのレトロ可愛い洗面台があった。その中には、キラキラと輝くガラスのような素材のものもあって、実日子は思わずそれを覗き込む。

「…何か気になるのがあった？」

「っ！」

突然背中に体温を感じて、実日子は体を強張らせる。

「さ、朔哉さんっ…!？」

「ああ、タイル？　この家、俺のばあちゃんが住んでただけど、数年前に亡くなって、空き家になってたんだあ。誰も住まないと家が傷むから、俺がここ貰ったの。小さい頃、結構頻繁に遊びに来てて、好きだったんだよね」

「あ…」

背後から手をが伸びてきて、スルリ♡と実日子の手に絡み付く。

「ほら、ここのガラス…、綺麗でしょ？」

「っう…あ…っ」

朔哉にキラキラと輝くガラスタイルの上に手を誘導される。

「気に入った？」

「んくっ…！」

上から重ねられた朔哉の手がスリスリ♡と実日子の指の間を撫でてくる。実日子は口から変な声が出ないように、必死に唇を噛みしめていた。

「俺が、タイル、貼り直したんだよ。前のは、もうひび割れがあったからね」

スリ♡…スリ♡…スリ♡…スリ♡

「ふ…っ…ん、あ…っ、さ、朔哉さん、手、離して…っ！」

「ん？ ああ、手を洗わないといけないでしょ？ そう言えば、ハンドソープ切らしてたかなあと思って見に来たんだ。まだあった？」

「ま、まだ洗ってないっ…ですっ！」

「え？ そうなの？　じゃあ俺がハンドソープ出してあげるね」

「え、あ、ちょー！」

「よいしょ」

やっと手を離してくれたと実日子が安堵の溜息を吐く。しかし、すぐに朔哉がにゅぶう♡とたくさんの泡を吐き出して、実日子の両手を背後から包み込んでしまった。

にゅるうっうう♡♡♡

「あうっ♡♡」

「……バイキンが…いっぱいいてるから、洗わないとダメだよね？」

にゅるう♡にゅるう♡にゅるう♡にゅるう♡にゅるう♡

「ひっ…あ…さ、くや、さんっ♡ま…ってえ…っ♡」

先ほどよりもさらにねちっこく朔哉の手が実日子に絡み付いてくる。

（朔哉さんの手、すっごくおっきい♡♡♡カリカリ♡♡♡指の間、引っ搔いてくるのやだっ…♡ビクビクしてるのバレちゃう♡うう、にやるにやるされる、変な気分になる…♡ほんとに、なんで、こんなっ…♡）

「ふっ…う…あ♡」

「苦しい？ 大丈夫？」

前かがみになり、ぴくぴくと体を震わせる実日子の耳元で、朔哉が優しく囁く。

「ふあっ♡」

「おてて、汚れちゃってるかなあって思っ、いっしょに、洗ってあげようと思っただけなんだ」

「っあ…♡わ、分かってます…っ、分かってますから…♡」

実日子が何度も頷くと、ぐう♡とさらに朔哉の体が密着してくる。

（朔哉さんの…香り…する♡）

はるか昔、まだ「妹」として可愛がられていた時に散々嗅いだ香りに、実日子はゾクゾク♡と体の奥から甘い快感が湧き出てくるのを感じてしまった。

「やあ…っ！」

そんな自分をはしたなくて、実日子は思わず朔哉の手を振り払い、後ろを向くと、硬い胸板を押しやってしまった。

「や、やめて…っ…あ…」

「……」

我に返って視線を上げると、朔哉が自分を見下ろしていた。美しい顔に一切の感情を乗せず、ただ無言で実日子を見下ろしている。

「さ、くや、さん……？」

「……汚れた？」

「え？」

「いや、何でもない。はは、ごめん、ちょっと距離が近かったかな？　びっくりしちゃったみたいだね」

「え、あ……い、いや、こちらこそ、突然、ごめんなさい」

「あちゃあ……どっちも泡塗れになっちゃったね？」

「え？　ああ！」

実日子は自分と朔哉の服にべったりとハンドソープの泡が付いてしまっていることに気付く。

「ご、ごめんなさい！」

「いいよ、俺も汗かいたから、着替えようと思ってたし。実日子ちゃんにも、俺のシャツ貸してあげるから居間で待ってて」

「え、あ、その…!」

実日子が止める前に、朔哉は二階の階段を上ってしまっていた。

「うう…、朔哉さんのペースに吞まれてしまってるっ!」

(このままじゃいつまでたっても家に帰れない! プリンを早く食べて家に帰ろう)

そう決意して、実日子は今のテーブルの前に座る。

「わあ…」

居間に面した縁側の窓は開け離され、風鈴の音が涼を運ぶ。

「風が吹くと、結構気持ちいかも…」

実日子がグンと背伸びをしていると「気に入った?」と朔哉が声を掛けてきた。後ろを振り返ると、上半身裸の朔哉がいて、実日子に白いシャツを差し出してくれている。

「さ、さくやさん、ふ、服を…！」

「ああ、ごめんね。暑くてちよつと着てらんないんだ。体温下がったらちゃんと着るからちよつと我慢してくれる？」

「ひ…い…！」

へによりと眉を下げて懇願してくる朔哉にこれ以上言うこともできず、実日子は首を縦に振った。

「あ、プリン持ってくるね！　ちよつと待ってて！」

にっこりと笑った朔哉が廊下を挟んで反対側にある台所へと向かう。

（わ、私も何かお手伝いを…！）

急いで上に着ていたシャツを着替えると、実日子も小走りで台所へと急ぐ。

「朔哉さん、私も何かお手伝いします…！」

「え？　そんなの大丈夫だよ。ただプリン取り出してコーヒー入れるだけだか

ら」

「じゃ、じゃあプリンを……！」

やかんに水を入れてガスコンロでお湯を沸かし始めた朔哉の背後を通り、冷蔵庫へと向かおうとした実日子は、突然後ろに下がって来た朔哉に当たってしまった。

「んきや！」

体勢が崩れ、横にあるダイニングテーブルに倒れ込みそうになったところで、逞しい腕が実日子の腰に回り、ぐっと引き寄せられた。

「大丈夫？」

「ひゃい」

至近距離で朔哉に尋ねられ、実日子の体がガチガチに固まる。

「……危なっかしいところはあんまり変わってないんだね」

「そ、そんなことないと思いますけど！」

「ふふ、そう？」

朔哉の腕にグッと力が入り、実日子と朔哉の体がさらに密着する。

「あわてんぼうで、そそっかしくて…一生懸命なところ、全然変わってないなあって思うよ？　仕事でもそんな感じ？」

「ひっ…♡」

朔哉の顔が、実日子に首筋に埋められる。

「仕事中も…そんな一生懸命ぴよこぴよこってしてるの？」

「きゃっ…、さ、朔哉さんっ！　首、い、嫌です…っ、当たってる…っ！」

「何が当たってるの？」

「んう♡」

朔哉の唇がふに♡と実日子の耳の下あたりに押し付けられた。

「やっ…やだ…やだぁ…っ」

「…………やだっと言葉、聞いてあげてきたのが、間違いだったかなあ？」

「え…？」

少しだけ息を乱した実日子が聞き返した瞬間、やかんのお湯が沸騰し「ぴい」と鋭い音が響き渡った。

「……お湯、沸いたね。コーヒーもプリンも俺が準備できるから、居間で待ってて」

「で、でも…！」

「…お手伝いは後で頼むから…、ね？」

「っ…は、はい」

乱れた髪を優しく整えられた実日子は、赤くなった顔を見られるのが嫌で、俯いたまま返事をする。そして一人で居間に戻り、机の前に正座をして待つこ

とにした。

（心臓に悪い……。やっぱりここに長居するのは危険だ……）

プリンをすぐに平らげて、コーヒーマシンの流し込んですぐにお暇しよう——。そうシミュレーションしていた実日子のポケットがぶるぶると振動する。

「あ」

スマートフォンをポケットから取り出した実日子は、仕事仲間である男にメッセージを返す。

「え？ この話、休み明けでいいって言ったのに！　なんで休みに入ってから送ってくるの、馬鹿大吾！」

質問に短く答えた後、実日子はメッセージの相手に対しての恨み辛みを綴り、えいやと送った。せっかくの休みなのに、仕事をさせられた実日子がメラメラと怒りを燃え上がらせていると、目の前にコトンと音をたてて美味しそう

な硬めのプリンとコーヒーが置かれる。

「あ、ありがとうございます」

「……え」

やけににっこりと笑った朔哉がスプーンでプリンを切り、持ち上げる。そして、それを実日子に差し出してきた。

「え……?」

「ほら、みかちゃん、あ……ん……は?」

「朔哉さん、自分で食べられるって言ってます!」

「いいから、いいから。それに、さっきも俺にぶつかって倒れそうになってたでしょ? 危なっかしいからさあ、一口目は食べさせてあげる」

「だから、それは……!」

「…こっちにいた時は、一口目は必ず俺が食べさせてあげてたよね？」

「っ…！」

朔哉の唇が実日子の耳にぐっと寄ってくる。実日子はビクッと体を跳ねさせて固まった。

「ね？ 覚えてる？ 覚えてないかなあ？ こうやって…俺は、何でも一口目はみかちゃんにあげたよね？」

「ふ…んぐう…むう！」

ぐりぐりとプリンが乗ったスプーンの先を唇に押し付けられ、実日子は困惑顔で朔哉を見つめる。

「食べて。ほら、食べなよ、みかちゃん」

「んう…むぐ」

「…食べな」

「あんう！」

スプーンからプリンが零れ落ちそうになってしまい、実日子は慌てて口を開けてスプーンを咥え込んだ。

「おいひい…」

（甘くて、私好みの硬さ…。カaramelも美味しい。卵の味が濃厚…！）

困った顔が吹っ飛び、目をキラキラさせながらプリンを頬張る実日子を見て、朔哉はバレないような小さい溜息を吐き、スプーンを実日子に差し出した。

「ほら、食べといて。俺は、ちょっと洗濯とかしてくるから、食べ終わったら声かけてね。あ、冷蔵庫にまだたくさん入ってるから、おかわりしたかったら、いくらでも食べていいよ？」

「ありがとうございますまふ」

「……………はあ」

くしゃくしゃと実日子の頭を撫でた朔哉が立ち上がり、廊下の奥へと消えていく。

「朔哉さん、料理も上手なんだなあ」

スプーンでかなり大きめにプリンを切り分け、口に頬張りながら実日子はその背中を見送る。

「おいひい…」

（見た目も良くて、優しくて、料理もうまいとか…ズルいなあ）

「はあ…」

実日子は風鈴の音を聞きながら、プリンを楽しむ。外を見ると、だんだんと日が傾いてきていた。パートと言っていた母も、そろそろ仕事は終わるだろう。

（ほんとに……もう帰らないと）

どうして自分が朔哉の家に来ることになったのかもよく分からない。

（とにかく、ここにいたら、また……朔哉さんのこと、好きになっちゃうから……！）

食べ終わったら声を掛けてくれとは言われていたが、実日子は黙って帰ることにした。朔哉とまた顔を合わせたら、未練が出て、余計なことを言ってしまうかもしれないから。

「……よし、帰ろう！ 朔哉さん、ご馳走様でした」

小さくお礼を言って頭を下げた実日子は、足音を立てないように玄関へと向かい、靴を履く。

「お邪魔しましたあ……あ、ああああ!!」

ゆっくりと玄関の引き戸を開けると、つむじにぼつりと何かが落ちてくる。

上を見ると、一気に雨粒が降ってきて、実日子の顔をぐしょぐしょに濡らした。

「うわああ！ え、あ、嘘！ 朔哉さん、布団、干したまま！」

庭に視線を向けると、シーツに包まれた敷布団を雨が濡らし始めていた。

「うわああ！ 布団はだめええ！ 朔哉さあああん！ お布団！ お布団、濡れちゃうう！」

家の中に向かってそう叫んでも、朔哉が出てくる気配はない。

「あああ！ もう！ なんでこんなことにい！」

実日子は必死で敷布団に駆け寄り、それを持ち上げると、縁側から家の中へと放り込む。

「はー、はーっ！ ああ、ほかの洗濯物も干しっぱなし！ 朔哉さん！ 朔哉さああん！ もう、何で出てこないのぉ！」

文句を言いながら、実日子は必死に洗濯物をかき集めて家の中へと回収し続ける。

「……………ナイスタイミング」

二階のベランダの手すりに頬杖をついた朔哉が、口角を挙げながら低い声で呟いていた。